

深刻な脅威といえるか。

この点に関し、スレーター (Dan Slater) によれば、マレーシアとシンガポールはその独立後の国家形成過程で、国内の反政府勢力 (華人の共産党) が非常に強かったために、支配エリート層が一致団結を図り、政党を中心に強固なエリート支配を確立した。他方、タイとフィリピンでは、戦後の国内の反政府勢力がそれほど深刻な脅威を支配エリートに与えなかったため、エリートは分裂的な構造となり、政治変動はエリート間の「派閥闘争」を中心に展開されてきたと説明する [Slater 2010]。

タイ共産党は支配エリートにとって脅威であったのか、あるいは脅威でなかったのかについては著者の主たる関心事ではないが、本書からはあまり脅威ではなかったということが読み取れるであろう。

第2に、著者は平和反乱後の共産党の非合法化が、共産党を武装闘争に向かわせたというが、インドシナをめぐる米中を中心とする国際政治も、タイ共産党に大きな影響を及ぼしたのではないか。5章で平和運動と地方工作は結果として、タイ共産党の武装闘争に道筋をつけたといえよう (p. 322) といい、終章 (p. 355) で、タイの「平和運動」の8番目の特徴として、平和運動弾圧の結果、タイ共産党の戦略が平和闘争から武装闘争に方向転換がなされたと指摘している。タイ共産党は1950年代初頭まではバンコクの華人中心の平和的活動であったのが、1965年以降、地方の国境地帯での武装闘争が中心になった。1965年はベトナム戦争が本格化する年である。冷戦期のタイ政治は米中関係の「代理政治」を展開していた部分があり、国際環境の変化への視点も有益であろう [高橋 2014: 113-114]。

ただし、以上の考察は、あくまでも評者の関心からのものであり、もとより本書の描こうとしたことではない。したがって、これは本書がもつ一次資料に基づく優れた歴史研究の価値をいささかも損ねるものではない。

(高橋正樹・新潟国際情報大学国際学部)

参考文献

高橋勝幸. 2014. 「自書を語る —— 『アジア冷戦に挑んだ平和運動 —— タイ共産党の統一戦線活動と大衆参加』」『タイ国情報』7月号: 104-115.

Slater, Dan. 2010. *Ordering Power: Contentious Politics and Authoritarian Leviathans in Southeast Asia*. New York: Cambridge University Press.

高城 玲. 『秩序のミクロロジー —— タイ農村における相互行為の民族誌』神奈川大学出版会, 2014, 354p.

本書は、タイ中部地方上部に位置するナコンサワン県一農村を舞台とした民族誌的研究の成果である。舞台となった農村では、多種多様な日常生活が繰り返される。農村住民は常に他の人々と関係をもち、そうした「相互行為の積み重ねによってタイ中部農村の日常生活が営まれ、そうした相互行為の東が村における社会関係や社会の秩序、社会へとつながっていく」(p. 2) といえる。本書の目的は、「タイ中部農村における人々が、日常生活においていかに行為しているのか、また、そうした日々の相互行為が社会の秩序、社会といかように結びついているのか」(p. 2)、その過程を明らかにすることである。別言すれば、「日常的な相互行為のミクロな態様を示し、そうした相互行為が幾重にも積み重ねられていく過程、すなわち関係性として社会の秩序が生成されていく過程を」(p. 2)、描き出すことである。

そのために筆者は、相互行為が密におこなわれる場を対象として分析する必要があるとする。第1章(序論)で先行研究を検討して本書の視角の新しさを主張し、第2章では宗教儀礼における集まりの場をとりあげる。さらに第3章では、国家との関係が生じる場、第4章では農業労働の場、第5章では地方首長選挙の場(政治の場)と、検討する場の範囲を広げていく。第6章では以上の章の要約と筆者の結論が述べられる。

各々の場において取り上げられる人々の相互行

為をまず紹介しておこう。宗教儀礼としては、ソクラン（タイ正月）での場面が取り上げられる。有力者の世帯では、ソクランに大勢の人が集まるが、そうした状況は、その家が親族内や村内に占める地位を可視化しているという。またタンブン（寄進）儀式では、寄進した額の多寡が人々から見られ、人々に知らされることで可視化される。またトート・パーパーという儀式でも、村人や外部の人が集う場で、外から寄進に来る人があり、彼らが村人とは異なる（卓越する）存在であることが可視化される。そしてそうした村外の人と接触できる村民も、一般のそうでない村民とは違うことが確認される。あるいはこうした宗教儀式にともなう会食が、どれぐらいの規模でおこなわれたかということも、村人間の違いを浮き立たせる。

第3章「村の中の国家」では、村内でおこなわれた政府主催の研修等の様子が描かれる。灌漑設備利用の研修では、研修参加者の間から、（研修を担当した）農協は「よい仕事をする」「よい組合」という言葉が出てくるという。「良い」というのは研修で繰り返して使われた言葉であったが、その中身については説明されることはなく、「国家から与えられた『組合＝善良』というレッテルが、無意識のうちに模倣され、正統なものになっていく」（p.105）。二つ目に取り上げられるは、ルークスア・チャオバーンという国家主義的志向をもつ村民ボランティアの研修である。研修では、国王賛歌、王妃賛歌、三本指で敬礼などを復唱、反復させられることで、民族、宗教、国王の重要性が当然のように個々の身体に浸透していく。三つ目は、村の中でおこなわれた国王誕生日の祝賀行事である。そこではバンコクで首相が述べた祝辞を村人が反復復唱する。国王の身体との直接的な相互行為はないが、肖像画や電波を通じた擬似的国王への行為が一方的に繰り返されることによって、国王の存在感が肥大化するという。

第4章「農業労働の場」では、稲作における労働提供の状況とそれに関連する人々の関係を、アパイを主とする一農家の事例で詳しく述べる。誰がどういう作業を何時間おこなったか、だけではなく、その前後に何をしたら、休息のとり方、作

業中に出されたおかずの品数にいたるまで叙述される。農業における相互行為として三つの事例が分析される。ひとつ目の事例では、稲刈り機の調達において相手を気遣う会話が交わされていることが示される。単に目的（稲刈り機とその作業者を依頼する）ということが機械的に交渉されるのではなく、相手の気持ちに配慮しながら交渉が進んでいる様子が描かれる。それによって二人の間の関係や差異性が生み出される。二つ目の事例では、会話の中で稲刈り作業のホストであるアパイを評価する内容になり、それによってホストと作業手伝いの人たちとの関係性が再構築、再認識される。三つ目の事例では、東北タイの出稼ぎ労働者に対する軽蔑的な表現を通して、村人が自分たちの卓越性を確認している。

第5章「ガムナン選挙の場」では、調査行政区（タンボン）でジャーイとブンという二人の村長がガムナンの座を選挙で争った例が取り上げられる。筆者はブンの側で起きた選挙をめぐる村人の相互関係を観察した。筆者は、個別訪問、饗応、買収の三つの場面について、候補者やその親族、運動員、票のとりまとめ人、一般村民（有権者）の会話とそこでの振る舞いを記述し、その意味を解釈する。例えば、饗応でのある会話でブンは、買収＝悪、飲食して語り合う＝善という対立図式をつくり相手候補を前者、自分を後者とする図式を作ったという。またある女性の村民が饗応の場でブンに挨拶をしたが、それをブンが無視したという場面がある。ブンは女性が対立候補から買収されたかと思っていたようだ。女性の夫や弟がブンの無視を見て、買収はない、ブンはえらい人だというような発言をした。こうした発言を筆者は、ブンの力を呈示しているものと解釈する。

いずれの場面でも筆者の記述は詳細を極める。単に何が行われたか、にとどまらず、だれがどういう動作をし、どういう発言をし、どういう反応が起きたか、さらにはその出来事に至るまでの事情や手続きまで述べられることもある。筆者が本のタイトルを「マイクロロジー」としたのは、まさにこうした筆者の研究方法を表している。評者はかつて東北タイの農村に住み込んで調査をしたこ

とがあるが、その時には見かけることのなかった出来事も数多く含まれている。例えばルークスア・チャオバーンの研修やガムナン選挙運動の様子などは、そうした機会に恵まれなければ調査ができないことでもあって、筆者によって記録された事実はたいへん興味深いものである。

しかしこうした事実の紹介自体は、筆者の目指したものではない。詳細な記述を通して明らかにしたかった理論的なテーマがあったのであり、それについて論じなければ本書の書評としては全く不十分であろう。

さて筆者のテーマとは、日々の相互行為が社会の秩序を生成していく過程を明らかにすることであった。そのために日常の行為を詳細に観察したのである。こうした方法は、序論部分でおこなった先行理論の検討に基づく。すなわち、慣習的行為（行為の繰り返し）が社会秩序を作るのだが、ブルデューはそれを「ハビトゥス」という曖昧な概念でしか説明していない。そこでゴッフマン流に行為戦略や行為過程を詳細にたどることで慣習的行為の中味を明確化する、というのが筆者の分析戦略である。

評者はこうした理論に詳しいものではないので、本書の実証部分を読んで感じた疑問を述べることで、本書を評論する。まず本書が取り上げる日常の相互行為が、社会秩序の形成につながる過程を本書の分析で示しているだろうか。そもそも日常行為はきわめて短期的に発生消滅する行為である。その個々の行為が、社会秩序形成という長期の変化につながっているということをどのようにして証明するのであろうか。

本書に出てくる事例は、その多くがむしろ社会秩序に従って人々が行為していることを示しているように思われる。たとえば農業労働のところで、アバイの隣宅に住むイサラがアバイに無償の農業労働を提供する場面がある。これは二人の間にパトロンクライアント関係があるからであって、そうした社会秩序がアバイとイサラの言動に反映している。こうした社会秩序に基づいて二人がおこなったひとつの日常行動は、社会秩序を確認したことにはなるだろうが、社会秩序を作ったかどうかまではわからない。たしかに一回の相互行為

が既存の社会秩序を「強化」する面はあろうが、そうした「変化」はやはり長期的にしか確認できないことである。

むしろ社会秩序の「生成過程」を短期の相互行為から説明しようとするならば、社会秩序が変化した場面こそとらえるべきであろう。ところが筆者は本書の残された課題として、社会秩序が変化する事例をあまり取り上げることができなかったと述べている。筆者にしてみれば上記のような批判は想定内のようであるが、本書の課題設定からすれば、「残された問題」とするにはあまりに大きいように思う。

また筆者の取り上げた相互行為が事例として代表性をもつかについても、検討の余地があるように思う。たとえば国家との関係についていえば、研修に参加した村人には国家の政策が「良い」、あるいは国家に「尽くす」という認識（秩序）が作られた（強化された）かもしれない。しかし同じ村人が別の場面では、国家に対して正反対の認識を形成することがある。たとえば交通違反を理由に警官につかまり、暗に賄賂を要求された、というようなことはよくあることである。そこでも警察（国家権力）と村人の相互交渉が起きるわけだが、生成される社会秩序はずいぶん違ったものになる。筆者がとりあげた相互交渉は、無数の相互交渉のうちの数例に過ぎず、その数例がどうしてあまたの相互交渉を代表できるのだろうか。

さらに取り上げた出来事の解釈についても疑問が起こる。たとえば、前掲の「ブンが饗応に来た女性を無視し、その親族が取りなした」という場面についてみる。筆者はブンの力を呈示しているものと解釈しているが、村人達是对立候補とコンタクトがあるにもかかわらず、ブンの饗応に来ていることに後ろめたさを感じ、場を取り繕っているだけかもしれない。買収しないというブンの説明を、その場では受け入れているように見える村民であるが、本当にそう思っているかどうかは、怪しいものである（そもそもすでに食べ物で買収しているのであるから）。問題としたいことは、どの解釈が正しいかではなく、正しいかどうかを判断することができないという点にある。つまり反証可能性の問題があるように思う。

先に述べたように、本書でとられた手法と実証が人類学や社会学の理論に対してなした貢献について、評者は評価をする能力をもたない。本書はタイ研究者だけでなく、こうした方法論に関心のある読者からも評論されるべき労作と考える。

(重富真一・アジア経済研究所)

伊藤正子、『戦争記憶の政治学——韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』
平凡社, 2013, 292p.

本書を一読してまず感服したのは、ベトナム研究の専門家である筆者がよくぞここまで韓国のことを調べあげて、ベトナム戦争の記憶をめぐる韓越比較研究を立派に成し遂げたことである。韓国軍のベトナム戦争参戦の記憶については金賢娥著・安田敏朗訳『戦争の記憶 記憶の戦争 韓国人のベトナム戦争』（三元社, 2009年）などの先行研究があるが、本書はそれらに依拠しつつさらに深めており、2009年以降の韓国における「国家有功者」顕彰や「ベトナム参戦碑」建立の動きもきちんとフォローしていて、非常に勉強になった。東アジアにおいて相互の「戦争の記憶」を冷静に突き合せていく調査・研究がまさに必要とされている今、本書はベトナム現代史研究のみならず、東アジア現代史研究の大きな成果だと評価できる。さらに感服させられたのは、筆者も「日本の嫌韓右翼に利用されて、『あげあし』をとられる可能性もある」(p.12)と述べているように政治的に非常に微妙なテーマに取り組んだ勇気である。私もベトナム戦争の「戦争の記憶」の聞き取り調査をしているが、率直に言って、本書のテーマは自分の手に余るものと敬遠してきた。筆者は日韓両国の過激な言辞に惑わされることなく、「韓国のNGOや個人など民間の地道な活動が、虐殺を生き延びたベトナムの人たちの心を解きほぐし、記憶を捻じ曲げたり誤魔化したり過去にフタをすることによってではなく、記憶を新たにすることで、赦しと和解が生まれていく過程」(p.228)を見事に描き、こうした活動こそ、「実は被害者であるベトナムの人々との真の和解を成し遂げることに繋がっていることを、分裂したままの世論を抱える

韓国社会に、第三者の立場から訴える」(p.228)とする姿勢を貫き通した。この点は筆者に対しおおいに敬意を表したい。

本書で扱っているベトナム戦争の記憶は、韓国軍によるベトナム民間人虐殺事件の記憶である。いうまでもなくベトナム人にとってのベトナム戦争の記憶は、虐殺事件の記憶ばかりではなく「戦闘の記憶」や「北爆の記憶」などもあり、虐殺事件の記憶だけですべてを語ることはできない。筆者は、ベトナムが現在、「戦争の記憶」をナショナリズムの中核におこうとしていない(p.202)とするが、虐殺事件の記憶の議論からだけでは直ちには一般化できないのではないだろうか。一方、筆者も指摘しているように虐殺事件の記憶は「公定記憶」の周縁的存在とされている。この点は爆撃の被害者などの民間戦争被害者の記憶と共通している[今井2013a]。これらの人々は「有功者」とはされておらず、補償の対象ともされていない取り残された存在である。国家において虐殺事件の記憶は、戦争中・戦争直後においては怨みを掻き立てて敵愾心を高揚させ、敵国を告発することに意味があり、実際、ベトナムでは虐殺現場や爆撃被災現場などに「憎悪碑」「怨みの碑」あるいは「復讐碑」が多数つくられている。戦後になると、かつての敵国との関係正常化における和解過程を象徴することに意味の重点が転じ、事実の究明や虐殺の生き残りの人々の意向はなおざりにされる傾向にある。「公定記憶」からは零れ落ちてしまうこういった「戦争の記憶」を掬い上げたことは本書の功績であろう。

私は虐殺事件の直接的な聞き取り調査をしたことはないが、本書を読みながら虐殺事件の聞き取り調査の困難さと調査者の立ち位置について考えさせられた。お線香を携帯しながら聞き取り調査をしたとの筆者の記述が非常に印象的であった。韓国人のク・スジョンや金賢娥、さらには筆者の虐殺の生き残りの人々へのインタビューがうまくいったのは、彼女たちとインタビューーとの「互いの痛み心に心をさせる交流」(p.114)が深化したことに主に起因するであろうが、インタビューアが女性であったことも大きかったのではないかとの感想も抱いた。これが虐殺した兵士を彷彿